

曇曙

機帆船の海灯が水平線を這い
剥げたペンキに寄り掛かり
日の出は見え
灯台は虚無を照らす
折れ曲がった地層
雲の下を雲が流れ
その高さを鳥のみにより推る
浜への階段は閉ざされ
ふと気付けば船は港へか
一艘だに見えず
雲間から最初の朱の斜めに
雲の流れにつれ
灯の如くゆっくりと弧を描く
そして空
私は崖を上りつめて360度
西風になぶられて立つ
雲の瓦解
潮の満ち始めて光の乱射し
次から次と白い指の群れが押し寄せ
なまめかしい指先で水肌を愛撫する

(1988.12.10)